

ボクとワタシの ことば ばなし 第2話

目 次

◆残されないことば	・・・・・・・・・・	2
♪シゲちゃん♪	・・・・・・・・・・	2
♪「知っちゃない・・・」♪	・・・・・・・・・・	3
♪それって、悲しい♪	・・・・・・・・・・	3
◆「共通語」がやっぱ変だべさ	・・・・・・・・・・	4
♪一人ひとりの「話しことば」♪	・・・・・・・・・・	4
♪「ワタシ語」からの景色♪	・・・・・・・・・・	4
♪トークする日本語♪	・・・・・・・・・・	5
♪「ワタシたち語」の世界♪	・・・・・・・・・・	5
♪文字っちゃうなら♪	・・・・・・・・・・	6
♪短文化がもたらすもの♪	・・・・・・・・・・	6
◆「噂ことば」と「仕事ことば」	・・・・・・・・・・	7
♪文字が生んだ男女間ギャップ♪	・・・・・・・・・・	7
♪「噂ことば」レベル？♪	・・・・・・・・・・	7
♪日本語の長所は欠点♪	・・・・・・・・・・	8
♪むずかし～、けど♪	・・・・・・・・・・	8

日本語の研究

ボクとワタシの
ことば ばなし 第2話

シンキング・バース

日本語研究班

残されない
ことば

実

は先日、明治時代まで遊びに行
って来ました。タイムトラベル
して来ちゃったんです。行った
場所は、東京の神田の近くでし
た。元お武家様の屋敷が並んだ所を少し離
れて、物騒な感じのあばら家が建っている
街に行ったのです。

というのも、ある元お武家様から、元の
家に仕えていた「家来（けらい）」が、今
どうしているのか、訪ねてみて欲しいと頼
まれたからです。そのお家来さんは、その
ちょっと物騒な長屋に、住んでいるらしい
と教えられました。

お家来さんというのは、元武士です。武
士といっても一番下のクラスで、明治維新
の時に「お役御免」と言って、リストラさ
れて失業しちゃったのです。運良く仕事が
見つかった人は良いけど、あてがなくて貧
乏になった人がたくさんいました。元お武
家様は、お家来さんがどんな風になってい
ないか、心配だったんですね。

ワタシは、ジーパンをはいて、上はジャ
ンパーを羽織った格好で、その物騒な長屋
に足を踏み入れました。

♪シゲちゃん♪

ワ

タシが訪ねた街は、あばら家
が並んだ、本当にスラムな街
でした。街全体に変な匂いが
漂ってるし、ホントにホント
に病気になりそな街でした。怖い雰囲気も
ありありです。止めとこかな、と正直思
いました。

住んでいる人は、ワタシの姿を見て用心
したのか、そそくさと自分の家に逃げ込
んでしまいました。ところが、一人の小さな
女の子が、ワタシのそばに駆け寄って来て、
両手を差し出したのです。着ている着物は
ボロボロで、足ははだし、垢まみれの真っ
黒な顔、髪もボサボサです。食べ物をおね
だりしてるんでしょう。

元お武家様は、「そのよう子に出会うて
も、物をあげてはならぬ」と言っていまし
た。「どのみち、テテナし子か母なし子で、
物乞いと盗人で暮らしておるのだろう」と
いうのです。

「お父さんか、お母さんは？」と、ワタシ
はその子に尋ねてみました。

その子は、首を横に振りしました。

「どこに住んでるの？」

その子は、振り向いて、長屋の奥の方を
指差しました。

「誰と住んでるの？」

その子は、答えません。そして、もう一
度両手をワタシに差し出しました。

ボクとワタシのことばばなし

・・・困ったわね。チョコレートなんてあげたら、大変なことになりそう・・・、と内心ワタシは思いました。

「お名前、教えてくれる？ そしたら、何かあげる」と、ワタシは言いました。

「シゲ・・・」

「シゲちゃん？ 年はいくつ？」

「ハチ・・・」

「お姉さんね、人を探してるの？ この長屋に、お武家のお家来さんだった人、住んでるの、知らない？」

「くれや！」と、シゲちゃんは大きな声を出しました。

ワタシは、仕方なくバックの中から、おせんべいを取り出しました。

「ここで食べるのよ、みんなに言っちゃダメよ」

シゲちゃんは、コクリとうなずきました。今風のおせんべいなんて、食べたことがないので、袋の開け方も知りません。ワタシが開けてあげると、シゲちゃんは、一気にそれを頬張り、ボリボリと音を立てて食べました。

「お家来さん、住んでるところ、知らない？」

シゲちゃんは、首を横に振りました。

♪「知っちゃない・・・」♪

東

京は、江戸時代からずっと、人口が世界一の大都市でした。

「世界一の大都市なんてすごい」と、思うかもしれませんがね。

でもね、地方から流れて来た貧乏な人たちも多くて、「田舎に帰れ」というお触れが出たほどでした。明治時代になっても、それは変わりませんでした。

というより、元武士だった人たちも、どんどん貧乏になって、東京のあちこちに貧乏な人たちの街ができました。江戸時代の

方が、まだ少しはましだったと言われるくらいでした。シゲちゃんのような子は、東京にたくさんいたのです。

明治時代になると、全国に小学校ができました。子供たちは、学校で字を習ったり、算術を習ったりできるようになりました。でも、シゲちゃんのような子は、学校にも行けません。戸籍があるのかどうかもわからないし、学校に行けるだけのお金も、ありません。お父さんとお母さんが誰なのかも、わからなかったりしたからです。

「シゲちゃんのお国は、どこ？」

「前はウシゴメ、その前は知っちゃない」

「誰と暮らしてるの？」

「知っちゃない」

「知らない人？」

「デッパ。サムライデッパ」

「お侍さんだったの？」

「知っちゃない・・・。くれや！」

ワタシは、おせんべいをもう二袋、シゲちゃんに渡しました。

♪それって、悲しい♪

日

本という国は、昔からずっとずっと、貧乏な人たちがたくさんいた国でした。お金持ちもいたけれど、貧乏な人たちが溢れていました。

今回お話しているのは、そういう人たちのことばについてです。そのことばは、とてもたくさんの人たちが使っていたのに、伝わらないし、残されない、ということです。シゲちゃんは、字が書けません。お話ししようとしても、「サムライデッパ」とか言って、何のことかわからない言い方をします。これでは、伝わりませんよね。でも、それは、シゲちゃん悪いからじゃありません。伝わらないことばは、それを喋る人たちのごと、全部無視され、全部なかったこ

ボクとワタシの ことば ばなし

とにされて来ました。それって、おかしいですよ。

清国との戦争に勝った、ロシアとの戦争に勝ったとかいくら言っても、シゲちゃんは、ずっと貧乏なままでした。シゲちゃんはたぶん、日本は戦争に勝ったんだよって聞けば、「バンザーイ！」とか言って喜んだかもしれません。でも、それって悲しい。両手をお国に突き出して、「くれや！」って言って良いんだよ、と言ってあげたいくなります。そういうお話が、この国には山のようにあるんです。

元お武家様が探していたお家来さんは、結局会えず仕舞いでした。その長屋にいて、どこかに行ったのかもしれないし、初めからそこには、いなかったのかもしれない。「コッパ侍の商い」とか言われて馬鹿にされながら、どこかで細々と商売をしていたかもしれません。そういう人たちのことばも、この国にはあまり残されてはいないのです。

※このお話はフィクションです。

「共通語」が やっぱり変だべさ



♪一人ひとりの「話しことば」♪

ワ

タシたちの「話しことば」は、時代によって、地域によって、性別によって、年齢によって、階層によって、さまざまです。

明治時代の「話しことば」と現代の「話しことば」は、ちがっていて当然です。日本人は、ずっと同じ日本語を喋って来たなんて、大まちがいです。性別でも、ちがいますよね。「～よね」とか「～なの」とか

「あら、・・・」のような話し方は女性が中心で、「～だろ」とか「～だよ」とか「よう、・・・」は、男性を中心に使われることばです。年齢によっても、「おいちい」のようなお子チャマことばもあれば、「そうじゃな」のようなおじいさんことばもあります。日本人は、思っている以上に、一人ひとりが、自己流の日本語を話しているのです。

♪「ワタシ語」からの景色♪

ワ

タシは、小さい頃から、あちこちを転勤する家に育ちました。

2年か3年に1回、北は北海道から南は関西地方まで、住む場所が変わる家庭でした。転勤のたびに、その地方の「地域のことば (Dialect)」と出会います。聞き慣れないことばやアクセントに、その都度合わせて行くなんで、ワタシにはできませんでした。ワタシは、ワタシのことばを、「共通語 (Common Language)」にしよう、と決めました。

「共通語」と言っても、たぶんそれは、ワタシ流の「共通語」です。アナウンサーのような訓練もしていないし、話し方教室に通った訳でもありません。一つの「地域のことば」に染まっていないというだけの、自己流「共通語」と言って良いことばです。

「ワタシ語」のような日本語ですね。

そんな「ワタシ語」を使い続けて来たワタシは、時代と共に変化して行く「共通語」の世界に、ちょっと戸惑うことが、最近増えて来ました。洗練されて来たのかもしれないけど、なんとなく変なんです。人は、年齢を重ねると、ことばに対して保守的になるのは、やむを得ないとは思いますが。ワタシが、それなりに年をとったせいかもしれませんね。

♪ トークする日本語 ♪

で も、「これって、どうなんだべ？」
「やっぱ、おかしいんでない？」
という日本語に出会うと、チェックしてみたい気持ちが、ムズムズ湧いて来てしまいます。

例えば、こんな日本語です。

「右クリックして頂きまして、一番下のプロパティを選んで頂けますか？ はい。そうしましたら、表示されたボックスの一番上にあるタブの二番目ですね。そこに●●と表示されていると思います。そこをクリックしてください。はい。では、その真ん中あたりですね。二つボタンが表示されておりますので、左側の○○の方をクリックしてください。次に、・・・」

大変丁寧な説明が、受話器の向こうから聞こえて来ると、聞いている方も心地良く、その指示に従って、画面を操作してしまいます。ほとんど「問題なし」の日本語です。

でも、ワタシは、この説明の所々で、問わず語りのように入る「はい」が、とっても気になってしまうのです。この子はどうして、こちらが何も言っていないのに、「はい」って言うんだろう？ 操作が終わっていないかもしれないでしょ。掛詞？ それとも、休符みたいなもの？ 今ドキの日本語って、こういうリズムなの？

これが、電話の向こうから一方的に話し掛けて来るセールストークになると、ワタシが口を挟む余地なんか、ほとんどなくなってしまいます。会話じゃなくて、トークなんですよ。

トークする日本語の弊害は、もう言わずもがなです。あちこちで、トークに騙されて、被害額は毎年数億円？ 受話器の向こうから聴こえて来る日本語トークは、日本語として「問題なし」なだけ、「問題あり」を生んでしまうんです。

どうして、こんなふうになってしまうんでしょうね。それはたぶん、「共通語」が招いた落とし穴です。ワタシが、ワタシ流の「共通語＝ワタシ語」で同じことを試みても、上手くは行かないでしょうね。ワタシが使っている「共通語」は、彼らや彼女たちほど日本語トークに慣れていない「ワタシ語」だからです。

♪ 「ワタシたち語」の世界 ♪

子 供たちが、大人の世界とはちがう自分たちの世界を作って、仲間同士だけで遊びたがるのは、今も昔も変わらないと、ワタシは思います。ことばに関して言えば、内緒のことばを共有して楽しむような、オチャラケ世界やおマセな世界が、広がってまいります。一部の子供たちの中でだけ通用する「共通語＝ワタシたち語」の世界です。

「ワタシたち語」の世界は、子供たちが社会性を身につけて行く上では、とても重要です。子供たち同士で役割を決めたり、「ごっこ遊び」のルールを決めたり、子供の成長を促す上では、欠かせない要素のひとつです。ちょっぴり残酷ですが、子どもたち同士の力関係が、そこで決まったりもします。

でも、その「ワタシたち語」の世界が暴走して、辛い事件まで起こってしまうと、放ってはおけません。子供たちだけの世界なので、見えづらいし、感じづらい。子供の肉体的な成長は、昔と大きく変わらないのに、事態が深刻になってしまうのは、社会の側の問題だって、考えざるを得ないでしょうね。

日本で「いじめ」の問題が、クローズアップされるようになったのは、1980年代頃からです。それ以前は、子供たちが学校で荒れ回る校内暴力の問題があって、それが

ボクとワタシの ことば ばなし

一応静かになると、「いじめ」にシフトしました。見えるようにやってたのが、見えなようにやるようになったんです。問題の根っこには、いろんな格差とか、偏見があるんだろうと思います。

その格差とか偏見が、根本的には解決されないまま、社会の環境は、さらに変化して行きました。画面の中で敵を倒して楽しむゲームが、子供たちの心を虜にしたり、ことばを取り扱うツールを、子どもたち自身が身につけるようになりました。「ワタシたち語」の世界が、画面上の世界とダブっちゃう世界に、子供たちは置かれ続けたのです。そして、子供たちはとうとう、画面上に文字っちゃうことばで、会話するようになりました。

♪文字っちゃうなら♪

文

字っちゃう話になると、ボクの出番です。会話の文字化は、



確かにこれまでにない現象ですね。

文字っちゃうことばは、もうそうなっちゃったんだから仕方ないと、ボクは思っています。だけど、文字っちゃうなら、変換ミスはしないくらいの基本的ルールは、守ってほしいというのが、ボクの意見です。

会話体を文字に置き換えるというのは、明治時代に起こった「言文一致運動」のことを考えれば、平成の「第二次言文一致運動」と言えるかもしれません。必ずしも、嘆かわしいことばかりではないのです。

ただ、その「言文一致」が、話しことばの差別語や軽蔑語を、そのまま文字にして電子変換してしまうところに、問題があるのです。「地域のことば」や年齢差によることばのちがひ、ジェンダーなど、もろもろのことばもごちゃ混ぜのため、規範もな

ければ、ルールもない、要するにアナキーな状態に陥っているのが、ネット上の日本語環境だとボクは思います。

「へば、なじよすべ」と、ワタシお姉さんなら書くでしょ？

ボクは、だったら、その規範とルールを作っちゃおうよ、と思っています。ボクとワタシお姉さんが、このお話を始めたのは、そのためでもあるんです。

♪短文化がもたらすもの♪

日

本語文は、幸か不幸か電子化によって、文書の大量生産が可能になりました。その本格的な普及から、たかだか20年です。その間に日本語文は、短文化と効率化の波に洗われました。短い日本語で、簡潔に書く。増えた文書量に対応するため、読み手はひと目で分かる文を求める。場合によっては、一つの単語だけで十分です。

その傾向が子供たちにも影響したら、どんな結果を招くかは、考えなくてもわかることです。差別語や軽蔑語を一つの単語で言ってしまう、書いてしまう。日本人のニーズに、合わせた日本語を書こうとすればするほど、簡潔な日本語は、残酷な日本語を呼んでしまうのです。

ボクたちは、日本の大人たちが無自覚なままに求め、進めていることが、目には見えない所で悪影響を及ぼしていることを、正したいと考えています。もちろん、簡素化がもたらすプラスの部分も認めた上で、補正し、矯正して行く必要があります。

何から何まで簡潔にし、効率化すれば良いってもんじゃないでしょ。それは、ボクたち日本人が、この20年間、ずっと思い続けていたことですよ。

「噂ことば」と 「仕事ことば」



洋

の東西を問わず、女性は噂話が好きな傾向にあると言われていいます。「恐怖の女子トーク」ということばもあるそうですが、噂話をして、その話を楽しんだり、驚いたり、時には行動を起こしたり。男性のボクには、ちょっと理解に苦しむことが、あつたりもします。

日本語の場合、それが文字とも関わっているので、アルファベット系の言語とはちがう厄介さも持っています。今回のボクのお話は、日本語の女性を中心とした「噂ことば」と、男性を中心とした「仕事ことば」についてのお話です。

♪文字が生んだ男女間ギャップ♪

性を中心に使われることが多かった「仕事ことば」は、日本語の場合は、漢語を中心に構成されて来ました。明治時代以前の武士や商人、僧侶や地主など、漢語を使えるのは限られた人たちでした。

明治時代になっても、その伝統は残り、お役所ことばや会社の業務用ことば、さまざまな分野の学問研究など、公式の文書やある程度の権威がある文書には、漢語が使われて来ました。その傾向は、戦後の国語改革でかなり緩和されましたが、漢語の果たす役割がまだまだ大きいのは、前回もお話したとおりです。

一方、日本語には、女性を中心に使われ続けた、「ひらがなことば」があります。明治時代以前は、文字を読めない人たちも

かなりいたので、「ひらがなことば」というより、各地の話しことばと言っても良いかもしれません。それぞれの地域で日常的に使っていたことばのことで、大多数の女性と文字が読めない農民や町人など、少なくとも見積もっても、日本の人口の4分の3以上を占める人たちが、使っていたことばと言えます。ことばの勢力としては、こちらの方が圧倒的に優位でした。

そんな中で、明治時代以降の日本語教育は、漢語を覚えるように指導するという方針をとりました。武士階級の子供たちなど、特定の人たちにとっては、違和感のない方針だったことでしょう。また、男子にとっても、漢語＝男性ことばとして、一応納得の行く方針だったにちがいません。

ところが、多くの女性たちにとって漢語は、元々距離があるもので、覚える必然性があるとは言い切れないものでした。「男たちが使うことばを、どうして女性も覚えなくちゃならないの？」その素朴な疑問が、日本語の場合は、今に繋がることばの男女間ギャップを生んで行くのです。

♪「噂ことば」レベル？♪



ェンダーのことに、女性が口を挟まない訳には行かないので、



ちょっとお話させていただきます。特に日本語とジェンダーというお話は、女性にとっても、実はとっても厄介な問題なんです。

仕事を持っている女性にとって、「仕事ことば」は必須です。日本語の場合は、漢語を中心とした「仕事ことば」という伝統があるため、女性であるワタシが「仕事ことば」を使うと、なんとなく男性化した女性のような印象を与えてしまいます。それ自体は、必ずしも悪いことばかりではあり

ボクとワタシの ことば ばなし

ませんが、ふと立ち止まると、どこかに違和感のようなものがあります。でも、伝統的な女性ことばを「仕事ことば」に持ち込むことは、女性であるワタシ自身が、快く思えないのです。

これって、どういうことなんだろう。何度か考えたことがありましたが、結論めいたものはありません。結局、女性性の日本語は、ホントに「噂ことば」レベルで使うか、女性性をお商売にしておられる方々のような形で「仕事ことば」として使うか、になっちゃうんですね。

女性の漢語に対する違和感は、戦後70年も経ってしまえば、相当希薄になっています。正規のというか、公式のというか、そういう日本語を使う時には、ジェンダーに関わりなく、相応の日本語を組み立てるべき、というのがワタシの意見です。

ただ、余白の部分でどうしても残るジェンダーに関わることは、実は「噂ことば」で片付けられては困る問題なんです。その問題の問題性を、日本語で表現しようとすると、なかなかできないんですね。それが、この問題は女性にとっても厄介、とワタシが言う理由です。

♪日本語の長所は欠点♪

男

性のボクから見ると、女性ことばはどうしても、感情的に



なりやすい、情緒的になりがちという印象を持ってしまいます。日本語の場合は、そこに「ひらがな」という文字が関わっているため、余計に問題を複雑にしてしまうのです。

女性にとって漢語は、平安時代以来続いている「ひらがなことば」に、明治期になってから入って来た新参者です。しかも、

「ひらがなことば」と漢語が、対等に教育され、公式に使われるようになったのは、戦後になってからです。1500年の伝統に対して、たった70年です。外枠にあったことばが、自分で望んだ訳でもないのに、どんどん内枠に入り込んで来たという感覚は、なんとなく分かるような気がします。

日本語の女性ことばは、どうしても「ひらがなことば」が中心になりがちです。男性に比べて、漢語の使用頻度が低く、だからこそ、女性的な日本語になるという日本語の特性は、ボクとしては尊重したいと思います。でも、それは日本語の大きな欠点の一つでもあるのです。

文字の問題として言えば、「ひらがなことば」で「仕事ことば」を作れないか、という問題になるのですが、これは、口で言うほど簡単なことではありません。というより、無理だとボクは思います。論理構築を「ひらがなことば」でしようとしても、単語の意味作用から用法まで、日本語の構造をガラッと変えない限り、不可能です。和歌に使っていたことばで、どうしたら学説を唱えることができるでしょう。

♪むずかし〜、けど♪

ボ

クちゃんの言うとおりでないですね。女性が抱えている日本語に



対するモヤモヤは、もう絶望的なくらい理論にならないってことなんです。どんなふうにお話しても、ホント「噂ことば」、何の権威もないし、陰で駄弁っちゃってるそこから出ないんですね。だから、なかなか本気で相手にしてもらえないし、愚痴るか、笑うか、何にも言わなくなっちゃう。

でも、逆に日本語の「仕事ことば」に問題なしかつていうと、そんな訳ありません。

ボクとワタシの ことば ばなし

むしろ問題だらけなんですね。最近特に感じるのは、とっても機械的になった印象を受けます。書いた文章を棒読みしてるみたいな、血も涙もない印象を与えてしまうんですね。それを「ジャパン・クール」って言うんだとしたら、ちょっとちがうんじゃない？ それと、理論を気取ったハラスメントですよ。トークする日本語だって、それなりに理論的で立派なんだけど、「問題あり」でしたよね。

だから、女性たちは、理論にならない「噂ことば」を抱えてモヤモヤするし、苛立つんです。だって、日本語の「仕事ことば」には、日本語の女性性を活かして理論を唱えられる構造が、まだ十分に整っていないんですから。

この問題を、日本語として解決しようとするのは、ホントに難しいことなんです。でも、これで引っ込むようなワタシじゃありません。

だって、ここで引っ込んだら、この「ことばばなし」、これでおしまいですモン。ちゃんと探してあります。オノマトペより、グッと来ます。今回お話した問題の解決策に、少しはなるかもしれません。

楽しみにしてて、くださいね～。

ボクとワタシの
ことば ばなし

続編もウキウキですよ！

第1話

- ・ことばとリズムのお話
- ・オノマトペを探検しちゃえ
- ・日本語は二刀流だよ
- ・明治翻訳語を今ドキ評価だ

第3話

- ・「です」の物語
- ・ちょっと困った「新東京ことば」
- ・言語スイッチの切り替え
- ・アルファベットからのメッセージ

第4話

- ・世界の言語と日本語
- ・言語環境と言語生活
- ・文字の歴史

第5話

- ・心の風景と日本語
- ・これからの日本語

ボクとワタシの言語対談

- ・めちゃんこファンタジー

●参考にさせて頂いた辞書や本です●

- ・中川清編『明治東京下層生活誌』（1994年、岩波書店）
- ・北原糸子著『都市貧民—戸籍法以前・以後—』（1994年、『岩波講座 日本通史第16巻 近代I 月報5号』岩波書店）
- ・読売新聞地方部編『東北ことば』（2002年、中公新書）
- ・新村出編『広辞苑 第二版補訂版』（昭和57年10月、岩波書店）
- ・亀井孝、河野六郎、千野栄一編著『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』（1997年1月、三省堂）
- ・スーザン・ロメイン著、土田滋・高橋留美訳『社会のなかの言語』（1997年4月、三省堂）

シンキング・バーズ新書

ボクとワタシの
ことば ばなし 第2話

2017年5月18日（初版）発行

著 者：シンキング・バーズ
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：シンキング・バーズ

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バーズに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。